

複利法における評価時点について

野 澤 孝 之 助

ま え が き

複利法を利用する場合において評価時点が決まれば、直接に計算するも亦間接計算を行うも結果は同一となる。このことは自明の理のようにして適宜に利用されている。

本稿は、これを各場合について確認し、評価時点移動自由の原則¹⁾を確立し、併せて諸公式をまとめようとするを目的とする。

本稿に先行する次の3論文は、それぞれの立場から財務数学の諸公式をまとめようとするもの(記号は異なる)であったが、本稿もその1つである。

"1" 投資計算の基礎公式について

本学会誌第15巻第2号(1979.12)

"2" 変額年金

同 第16巻第3号(1981.3)

"3" 定期払利息の新拡張

同 第17巻第2号(1981.11)

以下これらの論文を引用するときは、頭書の番号を示す。

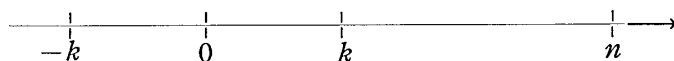
1. 一般公式

t 期末ごとに R_t を $t=0, 1, \dots, n$ と $(n+1)$ 期支払われる年金の1期の元利率 f における現時点の評価額 V_0 は、次のようである。

$$V_0 = \sum_{t=0}^n R_t f^{-t} \quad [1]$$

これを一般公式として、以下、諸公式を誘導する。

評価時点を次図のように定める。各時点は、それぞれ期末を示す。



さて、公式[1]において、 n 時点における評価額 V_n は、次のようになる。

$$\begin{aligned} V_n &= \sum_{t=0}^n R_t f^{n-t} = V_0 f^n \\ &= V_0 f^k f^{n-k} = V_k f^{n-k} \end{aligned} \quad [2]$$

V_n を $\sum_{t=0}^n R_t f^{n-t} = V_n$ と直接計算しても、いったん $V_0 f^k = V_k$ を求め、これを $V_k f^{n-k} = V_n$ と間接計算によっても同一結果を得ることは明らかである。以下についても同様であることを、逐次に確認する。

$$\begin{aligned} V_{-k} &= \sum_{t=0}^n R_t f^{-(k+t)} = V_0 f^{-k} \\ &= V_0 f^n f^{-(n+k)} = V_n f^{-(n+k)} \end{aligned} \quad [3]$$

2. 複利現価・複利終価

公式[1]において、

$$\begin{aligned} R_0 &= P \\ R_1 &= R_2 = \dots = R_n = 0 \end{aligned}$$

と置き、 $f=1+i$ とする。

$$V_0 = \sum_{t=0}^n R_t (1+i)^{-t} = P(1+i)^{-0} = P$$

公式[2]から、

$$\begin{aligned} V_n &= V_0 (1+i)^n = P(1+i)^n \\ \therefore V_0 &= V_n (1+i)^{-n} \end{aligned}$$

を得る。

現在、一括払 P の n 期の複利現価 V_0 、複利終価 V_n (これを S と置くこともある) の公式を得る。

また、年 i の利率を年 m 回切替 (転化) する利率を $i_{(m)}$ ²⁾ で示し、名目利率というに對し、年 1 回転化の場合 $i_{(1)} = i$ で示し、これを実効利率という。

$$\begin{aligned} f &= \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^m \\ V_n &= V_0 \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^{mn} = P \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^{mn} \end{aligned}$$

上式において、 $m \rightarrow \infty$ とすると、

$$f = \lim_{m \rightarrow \infty} \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^m$$

ここで、 $\frac{m}{i_{(m)}} = x$ と置くと、 $m = x \cdot i_{(m)}$ となり、 $i_{\infty} = \delta$ と置くと、

$$f = \lim_{m \rightarrow \infty} \left\{ \left(1 + \frac{1}{x}\right)^x \right\}^{i_{(m)}} = e^{i_{\infty}} = e^{\delta} \quad 3)$$

となり、この δ を利力という。

$$f = e^\delta$$

$$V_n = P e^{\delta n}$$

$$V_0 = V_n e^{-\delta n}$$

3. 年金現価・年金終価・据置年金現価

以下、第6節まで $f = 1 + i$ の場合について論ずる。

$$(1) \quad \left. \begin{array}{l} R_0 = 0 \\ R_1 = R_2 = \dots = R_n = R \end{array} \right\} n \text{ 期期末払}$$

公式〔1〕

$$V_0 = \sum_{t=1}^n R(1+i)^{-t} = R \cdot \frac{1 - (1+i)^{-n}}{i} \quad 4) = R \cdot a_{\overline{n}|i}$$

(注) Σ の範囲に注意。

アドオン方式

P をアドオン (add-on) 利率 r (年で示されることが多いが、 n に単位を揃える) で n 期借入れたときは、アドオン方式は全期間の単利終価を毎期末均等払するから、上記 R は $P \left(\frac{1}{n} + r \right)$ となる。

$$V_0 = \sum_{t=1}^n P \left(\frac{1}{n} + r \right) (1+i)^{-t}$$

$$P = P \left(\frac{1}{n} + r \right) a_{\overline{n}|i}$$

$$\therefore (a_{\overline{n}|i})^{-1} = \frac{1}{n} + r \quad 5)$$

公式〔2〕

$$V_n = \sum_{t=1}^n R(1+i)^{n-t} = R \cdot a_{\overline{n}|i} (1+i)^n$$

$$= R \cdot \frac{(1+i)^n - 1}{i} = R \cdot S_{\overline{n}|i}$$

公式〔3〕

$$V_{-k} = \sum_{t=1}^n R(1+i)^{-(k+t)} = R \cdot a_{\overline{n}|i} (1+i)^{-k} = R \cdot k | a_{\overline{n}|i}$$

$$= R \cdot \frac{(1+i)^{-k} - (1+i)^{-(k+n)}}{i} = R \cdot \frac{\{1 - (1+i)^{-(k+n)}\} - \{1 - (1+i)^{-k}\}}{i}$$

$$= R(a_{\overline{k+n}|i} - a_{\overline{k}|i})$$

年金現価から見ると、評価時点を右へ移動（将来へ進む、 f^t を乗ず）したものが年金終価であり、左へ移動（遡る、 f^{-t} を乗ず）したものが据置年金現価と考えることができる。換言すれば、年金現価・年金終価・据置年金現価は、評価時点の相違に過ぎないといえるものである。

$$\begin{aligned} V_{n+k} &= \sum_{t=1}^n R(1+i)^{n-t+k} = V_0(1+i)^{n+k} = V_n(1+i)^k \\ &= R \cdot S_{\overline{n}|i}^i(1+i)^k = R \cdot \frac{(1+i)^{n+k} - (1+i)^k}{i} \\ &= R(S_{\overline{n+k}|i} - S_{\overline{n}|i}) \end{aligned}$$

本式は、 n 年積立後の年金を k 年据置いた場合の終価であって、この種年金を **forborne annuity** という。

〔例1〕 毎月末¥10,000を10か月支払われ、其後2か月据置かれる年金の終価を求めよ。ただし、月利0.5%とする。

〔解〕 ① $V_{n+k} = R \cdot S_{\overline{n}|i}^i(1+i)^k$ による。

$$\begin{aligned} V_{12} &= ¥10,000 \times 10.22802641 \times 1.010025 \\ &= \underline{\underline{¥103,306}} \end{aligned}$$

② $V_{n+k} = R(S_{\overline{n+k}|i} - S_{\overline{n}|i})$ による。

$$\begin{aligned} V_{12} &= ¥10,000 \times (12.33556237 - 2.005) \\ &= \underline{\underline{¥103,306}} \end{aligned}$$

(2) $R_0 = R_1 = \dots = R_{n-1} = R$ } n 期期首払
 $R_n = 0$

$$\begin{aligned} V_0 &= \sum_{t=0}^{n-1} R(1+i)^{-t} = R\{1 + (1+i)^{-1} + \dots + (1+i)^{-(n-1)}\} = R \cdot a_{\overline{n}|i}(1+i) \\ &= R \cdot \ddot{a}_{\overline{n}|i} = R(a_{\overline{n-1}|i} + 1) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} V_n &= \sum_{t=0}^{n-1} R(1+i)^{n-t} = V_0(1+i)^n = R \cdot S_{\overline{n}|i}(1+i) \\ &= R \cdot \ddot{S}_{\overline{n}|i} = R(S_{\overline{n+1}|i} - 1) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} V_{-k} &= \sum_{t=0}^{n-1} R(1+i)^{-(k+t)} = V_0(1+i)^{-k} \\ &= R \cdot \ddot{a}_{\overline{n}|i}(1+i)^{-k} = R(a_{\overline{n+k-1}|i} - a_{\overline{k-1}|i}) \end{aligned}$$

(2)期首払年金は、(1)期末払年金において、評価時点を1期右へ移動したものと考えることができる。

4. 償還賦金・積立賦金

前節(1)——期末払——の場合における R を算出すると、次のようになる

$$R = V_0(a_{\overline{n}|i})^{-1}$$

$$R = V_{-k}(1+i)^k(a_{\overline{n}|i})^{-1} = V_{-k}(a_{\overline{n+k}|i} - a_{\overline{n}|i})^{-1}$$

これを償還賦金といい、

$$R = V_n(S_{\overline{n}|i})^{-1} = V_n\{(a_{\overline{n}|i})^{-1} - i\} \quad 6)$$

これを積立賦金という。

また、当然に次のような関係にある。

$$R = V_0(a_{\overline{n}|i})^{-1} = V_n(1+i)^{-n}(a_{\overline{n}|i})^{-1} = V_n(S_{\overline{n}|i})^{-1}$$

〔例2〕 いま ¥100,000 を借入れ、1 か月据置後10か月間毎月末で償還するとき、賦金はいくらか。ただし、月利0.5% とする。

〔解〕 ① $R = V_{-k}(1+i)^k(a_{\overline{n}|i})^{-1}$ による。

$$\begin{aligned} R &= ¥100,000 \times 1.005 \times 0.10277057 \\ &= \underline{¥10,328} \end{aligned}$$

② $R = V_{-k}(a_{\overline{n+k}|i} - a_{\overline{n}|i})^{-1}$ による。

$$\begin{aligned} R &= ¥100,000 \times (10.67702673 - 0.99502488)^{-1} \\ &= \underline{¥10,328} \end{aligned}$$

5. 変 額 年 金

本節においては、毎期末の支払金が、特別の形で変額する場合について考察する。

(1) 支払金が等比数列をなす場合

$$R_t = R(1+z)^{t-1} \quad \text{ただし、} z > -1$$

公式〔1〕

$$\begin{aligned} V_0 &= \sum_{t=1}^n R(1+z)^{t-1}(1+i)^{-t} = \frac{R}{1+i} \cdot \frac{1-(1+z)^n(1+i)^{-n}}{1-(1+z)(1+i)^{-1}} \quad (z \neq i) \\ &= R \cdot \frac{1-(1+z)^n(1+i)^{-n}}{i-z} \end{aligned}$$

また、 $\frac{1+i}{1+z} = 1+i'$ と置くと、

$$V_0 = R(1+z)^{-1} \sum_{t=1}^n (1+i')^{-t} = R(1+z)^{-1} a_{\overline{n}|i'}$$

と電卓利用に便利な公式を得る。 $i' < 0$ の場合にも支障はない⁷⁾。

〔例3〕 第1月¥10,000 第2月¥9,000 と毎月前月の10%減で毎月末に10か月支払われる年金の現価を求めよ。ただし、月利0.5% とする。

〔解〕 ① $V_0 = R \cdot \frac{1-(1+z)^n(1+i)^{-n}}{i-z}$ による。

(注) $z = -0.1$

$$V_0 = ¥10,000 \times \frac{1 - 0.34867844 \times 0.95134794}{0.105}$$

$$= \underline{\underline{¥63,646}}$$

② $V_0 = R(1+z)^{-1} a_{\overline{n}|i'}$ による。

$$i' = \frac{1+0.005}{1-0.1} - 1 = 11 \frac{2}{3} \%$$

$$V_0 = ¥10,000 \times 1.1111 \times 5.7281 = 6129$$

$$= \underline{\underline{¥63,646}}$$

公式〔2〕

$$V_n = \sum_{t=1}^n R(1+z)^{t-1} (1+i)^{n-t} = V_0(1+i)^n$$

$$= R \cdot \frac{(1+i)^n - (1+z)^n}{i-z}$$

$$= R(1+z)^{-1} a_{\overline{n}|i'} (1+i)^n = R(1+z)^{n-1} S_{\overline{n}|i'}$$

公式〔3〕

$$V_{-k} = \sum_{t=1}^n R(1+z)^{t-1} (1+i)^{-(k+t)} = V_0(1+i)^{-k}$$

$$= R \cdot \frac{(1+i)^{-k} - (1+z)^n (1+i)^{-(k+n)}}{i-z}$$

$$= R(1+z)^{-1} a_{\overline{n}|i'} (1+i)^{-k} = R(1+z)^{-(k+1)} (a_{\overline{k+n}|i'} - a_{\overline{k}|i'})$$

(2) 支払金が等差数列をなす場合

$$R_t = R + Q(t-1) \quad \text{ただし, } R_t = R + Q(t-1) > 0$$

$$\therefore Q > -\frac{R}{t-1} \quad (t \neq 1)$$

$$V_0 = \sum_{t=1}^n \{R + Q(t-1)\} (1+i)^{-t}$$

$$= (R-Q) \sum_{t=1}^n (1+i)^{-t} + Q \cdot \sum_{t=1}^n t(1+i)^{-t}$$

ここで

$$\begin{aligned} [1 - (1+i)^{-1}] Q \cdot \sum_{t=1}^n t(1+i)^{-t} &= Q \{ (1+i)^{-1} + (1+i)^{-2} + \dots \\ &\quad + (1+i)^{-n} - n(1+i)^{-(n+1)} \} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \therefore Q \cdot \sum_{t=1}^n t(1+i)^{-t} &= Q \cdot \frac{(1+i)a_{\overline{n}|i} - n(1+i)^{-n}}{i} \\ &= Q \cdot \frac{(1+i)a_{\overline{n}|i} - n(1-i \cdot a_{\overline{n}|i})}{i} \\ &= Q \left\{ \left(\frac{1}{i} + 1 + n \right) a_{\overline{n}|i} - \frac{n}{i} \right\} \end{aligned}$$

これを原式に代入する。

$$\begin{aligned}
 V_0 &= (R-Q)a_{\overline{n}|i} + Q \left\{ \left(\frac{1}{i} + 1 + n \right) a_{\overline{n}|i} - \frac{n}{i} \right\} \\
 &= \left\{ R + Q \left(\frac{1}{i} + n \right) \right\} a_{\overline{n}|i} - \frac{Qn}{i} \\
 V_n &= \sum_{t=1}^n \{ R + Q(t-1) \} (1+i)^{n-t} = V_0(1+i)^n \\
 &= \left\{ R + Q \left(\frac{1}{i} + n \right) \right\} S_{\overline{n}|i} - \frac{Qn}{i} (1+i)^n \\
 &= \left(R + \frac{Q}{i} \right) S_{\overline{n}|i} - \frac{Qn}{i} \\
 V_{-k} &= \sum_{t=1}^n \{ R + Q(t-1) \} (1+i)^{-(k+t)} = V_0(1+i)^{-k} \\
 &= \left\{ R + Q \left(\frac{1}{i} + n \right) \right\} (a_{\overline{k+n}|i} - a_{\overline{k}|i}) - \frac{Qn}{i} (1+i)^{-k} \\
 &= \left(R + \frac{Q}{i} + Qn \right) a_{\overline{k+n}|i} - \left(R + \frac{Q}{i} \right) a_{\overline{k}|i} - \frac{Qn}{i}
 \end{aligned}$$

変額年金においても、評価時点移動自由の原則は成立している。

〔例4〕 1か月据置後第1月は¥10,000第2月は¥10,100と毎月¥100増で毎月末10か月支払われる年金の現価を求めよ。ただし、月利0.5%とする。

〔解〕 ① $V_{-k} = V_0(1+i)^{-k} = \left[\left\{ R + Q \left(\frac{1}{i} + n \right) \right\} a_{\overline{n}|i} - \frac{Qn}{i} \right] (1+i)^{-k}$ による。

$$\begin{aligned}
 V_{-1} &= \left[\left\{ ¥10,000 + ¥100 \times \left(\frac{1}{0.005} + 10 \right) \right\} a_{\overline{10}|0.5\%} - \frac{¥100 \times 10}{0.005} \right] \times (1+0.005)^{-1} \\
 &= [¥31,000 \times 9.73041186 - ¥200,000] \times 0.99502488 \\
 &= \underline{\underline{¥101,137}}
 \end{aligned}$$

② $V_{-k} = \left(R + \frac{Q}{i} + Qn \right) a_{\overline{k+n}|i} - \left(R + \frac{Q}{i} \right) a_{\overline{k}|i} - \frac{Qn}{i}$ による。

$$\begin{aligned}
 V_{-1} &= \left(¥10,000 + \frac{¥100}{0.005} + ¥100 \times 10 \right) a_{\overline{10}|0.5\%} - \left(¥10,000 + \frac{¥100}{0.005} \right) a_{\overline{1}|0.5\%} - \frac{¥100 \times 10}{0.005} \\
 &= ¥31,000 \times 10.67702673 - ¥30,000 \times 0.99502488 - ¥200,000 \\
 &= \underline{\underline{¥101,137}}
 \end{aligned}$$

(3) 特殊な変額年金

i) 債券価格公式

$$\left. \begin{aligned}
 R_0 &= 0 \\
 R_1 &= R_2 = \dots = R_{n-1} = Cg \\
 R_n &= Cg + C
 \end{aligned} \right\}$$

$$\begin{aligned}
 V_0 &= \sum_{t=1}^n Cg(1+i)^{-t} + C(1+i)^{-n} \\
 &= Cg \cdot a_{\overline{n}|i} + C(1+i)^{-n}
 \end{aligned}$$

$$=C\{1-(i-g)a_{\bar{n}|i}\}$$

となり、これは額面金額 C 、債券利率 g 、償還期限 n の評価利率 i における債券価格公式である。

ii) 定期払利息の複利終価公式

i) において、 $C=P$ 、 $g=r$ とし、 V_n を求める。

$$\begin{aligned} V_0 &= P\{1-(i-r)a_{\bar{n}|i}\}(1+i)^n \\ &= P\{(1+i)^n-(i-r)S_{\bar{n}|i}\} \\ &= P(1+r \cdot S_{\bar{n}|i}) \end{aligned}$$

これは元金 P 、利率 r の利息を毎期支払われる定期払利息の利率 i における n 年後の複利終価公式である⁸⁾。

i), ii) は、現価、終価の相違はあるが、本質的に同一問題であると考えることができる。

iii) Hoskold 公式

V_0 を投資すれば、 n 年間毎年末 R ずつ収益が得られ、なお、 n 年後に S が残存するものとする。このとき投資には報酬率 r を要求し、 $(R-V_0r)$ の蓄積には報酬率 r より低い蓄積率 i によるものとする。この V_0 を求める。

問題を2分して考え、 V_0 に対する要求額と収益の各終価を求め、これを等置して V_0 を求める。

$$\sum_{t=1}^n R(1+i)^{n-t} + S = V_0(1+r \cdot S_{\bar{n}|i})$$

(注) 右辺は、ii) の場合である。

$$\therefore V_0 = \frac{R \cdot S_{\bar{n}|i} + S}{1+r \cdot S_{\bar{n}|i}}$$

本式は、残価ある場合の Hoskold の公式である⁹⁾。

iv) 旧 MAPI 方式

G. Terborgh は、設備原価 C 、 n 期末に S の残価するものとし、毎期の最新設備に対する操業費 R_t を第1期0、第2期 G …… と直線的に増加するとし、その原価合計の年当り AM を考え、これが最小になる n を経済寿命と考えた。

$$\left. \begin{aligned} R_0 &= C \\ R_t &= G(t-1), \quad R_n = G(n-1) - S \end{aligned} \right\}$$

$$\begin{aligned} AM &= \left[C + \sum_{t=1}^n G(t-1)(1+i)^{-t} - S(1+i)^{-n} \right] (a_{\bar{n}|i})^{-1} \\ &= \left\{ C + G \left(\frac{1}{i} + n \right) a_{\bar{n}|i} - \frac{Gn}{i} - S(1-i \cdot a_{\bar{n}|i}) \right\} (a_{\bar{n}|i})^{-1} \end{aligned}$$

$$= \left(C - \frac{Gn}{i} - S \right) (a_{\overline{n}|i})^{-1} + G \left(\frac{1}{i} + n \right) + Si \quad (10)$$

6. 変額賦金

前節の諸公式から、賦金を算出する。

$$(1) R_t = R(1+z)^{t-1}$$

$$R = V_0 \cdot \frac{i-z}{1-(1+z)^n(1+i)^{-n}} = V_0(1+z)(a_{\overline{n}|i'})^{-1}$$

$$R = V_n \cdot \frac{i-z}{(1+i)^n - (1+z)^n} = V_n(1+z)^{-(n-1)}(S_{\overline{n}|i'})^{-1}$$

$$R = V_{-k} \cdot \frac{i-z}{(1+i)^{-k} - (1+z)^n(1+i)^{-(k+n)}} = V_{-k}(1+z)^{k+1}(a_{\overline{k+n}|i'} - a_{\overline{k}|i'})^{-1}$$

$$(2) R_t = R + Q(t-1)$$

$$R = \left(V_0 + \frac{Qn}{i} \right) (a_{\overline{n}|i})^{-1} - Q \left(\frac{1}{i} + n \right)$$

$$R = \left(V_n + \frac{Qn}{i} \right) (S_{\overline{n}|i})^{-1} - \frac{Q}{i}$$

$$R = \left\{ V_{-k} + \frac{Qn}{i} (1+i)^{-k} \right\} (a_{\overline{k+n}|i} - a_{\overline{k}|i})^{-1} - Q \left(\frac{1}{i} + n \right)$$

7. 特殊な年金

(1) 年1回払年金

第3節から前節までは、 $f=1+i$ を利用してきた。

本節では、これを拡張して次の各場合を考察する。

i) $i_{(m)}$ を利用する。 $f = \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m} \right)^m$

公式[1]

$$V_0 = \sum_{t=0}^n R_t \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m} \right)^{-mt}$$

公式[2]

$$\begin{aligned} V_n &= \sum_{t=0}^n R_t \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m} \right)^{m(n-t)} = \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m} \right)^{mn} \sum_{t=0}^n R_t \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m} \right)^{-mt} \\ &= V_0 \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m} \right)^{mn} \end{aligned}$$

公式[3]

$$\begin{aligned}
 V_{-k} &= \sum_{t=0}^n R_t \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^{-m(k+t)} = \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^{-mk} \sum_{t=0}^n R_t \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^{-mt} \\
 &= V_0 \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^{-mk}
 \end{aligned}$$

n 期期末払の場合は $\sum_{t=1}^n$, 期首払の場合は $\sum_{t=0}^n$ とする。

$R_t = R(1+z)^{t-1}$ n 期期末払のとき

$$\begin{aligned}
 V_0 &= \sum_{t=1}^n R(1+z)^{t-1} \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^{-mt} \quad z > -1 \\
 &= R(1+z)^{-1} a_{\overline{n}|i''} \quad \text{ただし, } \frac{\left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^m}{1+z} = 1+i''
 \end{aligned}$$

$z=0$ のとき

$$\begin{aligned}
 V_0 &= \sum_{t=1}^n R \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^{-mt} = R \cdot \frac{1 - \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^{-mn}}{\left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^m - 1} \\
 &= R \cdot \frac{a_{\overline{n}|i}}{S_{\overline{n}|i}} \quad \text{at } \frac{i_{(m)}}{m} \quad \text{at 以下は, 1期の利率}
 \end{aligned}$$

ii) 利力を利用する $f=e^\delta$

公式〔1〕

$$V_0 = \sum_{t=0}^n R_t e^{-\delta t}$$

公式〔2〕

$$V_n = \sum_{t=0}^n R_t e^{\delta(n-t)} = V_0 e^{\delta n}$$

公式〔3〕

$$V_{-k} = \sum_{t=0}^n R_t e^{-\delta(k+t)} = V_0 e^{-\delta k}$$

$R_t = R+Q(t-1)$ n 期期末払のとき

$$\begin{aligned}
 V_0 &= \sum_{t=1}^n \{R+Q(t-1)\} e^{-\delta t} \\
 &= (R-Q) \sum_{t=1}^n e^{-\delta t} + Q \cdot \sum_{t=1}^n t e^{-\delta t} \\
 &= \left\{ R+Q \left(\frac{1}{e^\delta - 1} + n \right) \right\} \frac{1-e^{-\delta n}}{e^\delta - 1} - \frac{Qn}{e^\delta - 1}
 \end{aligned}$$

$Q=0$ のとき

$$V_0 = \sum_{t=1}^n Re^{-\delta t} = R \cdot \frac{1 - e^{-\delta n}}{e^\delta - 1} = R \cdot a_{\overline{n}|} \text{ at } (e^\delta - 1)$$

iii) 割引率, 割引力を利用する。

$$i = \frac{V_1 - V_0}{V_0} \quad \therefore V_1 = V_0(1+i)$$

よって明らかなように, 1年間の増加分を現価 V_0 に対比したものが利率であるが, これを

$$d = \frac{V_1 - V_0}{V_1} \quad \therefore V_0 = V_1(1-d)$$

$$V_1 = V_0(1-d)^{-1}$$

とすると, d は1年間の増加分を終価 V_1 に対比したものであって, これを割引率といい, 利用されることがある。この場合は f を拡張して用いる。

$$1+i = (1-d)^{-1}$$

$$f = (1-d)^{-1}$$

$$\text{公式〔1〕} \quad V_0 = \sum_{t=0}^n R_t(1-d)^t$$

$$\text{公式〔2〕} \quad V_n = \sum_{t=0}^n R_t(1-d)^{-n+t} = V_0(1-d)^{-n}$$

$$\text{公式〔3〕} \quad V_{-k} = \sum_{t=0}^n R_t(1-d)^{k+t} = V_0(1-d)^k$$

割引現価・終価

$$\left. \begin{array}{l} R_0 = P \\ R_1 = R_2 = \dots = R_n = 0 \end{array} \right\}$$

$$V_0 = P$$

$$V_n = V_0(1-d)^{-n}$$

割引率による n 期期末払年金現価・終価

$$\left. \begin{array}{l} R_0 = 0 \\ R_1 = R_2 = \dots = R_n = R \end{array} \right\}$$

$$V_0 = \sum_{t=1}^n R(1-d)^t$$

$$= R \cdot \frac{(1-d)\{1-(1-d)^n\}}{d} = R \left\{ \frac{1-(1-d)^{n+1}}{d} - 1 \right\}$$

$$= R\{S_{\overline{n+1}|} \text{ at } (-d) - 1\}$$

$$V_n = V_0(1-d)^{-n} = R \left\{ \frac{(1-d)^{-(n+1)} - 1}{d} + 1 \right\} = R\{a_{\overline{n+1}|} \text{ at } (-d) + 1\}$$

〔例5〕 毎月末¥10,000を1か年支払われる年金現価および終価を求めよ。ただし, 割引率を

月 0.5% とする。

[解] 現価 = $V_0 = R\{S_{\overline{n}|} \text{ at } (-d) - 1\}$ による。

$$\begin{aligned} V_0 &= \text{¥}10,000 \times (12.6170 - 1) \\ &= \text{¥}116,171 \end{aligned}$$

終価 = $V_n = R\{a_{\overline{n}|} \text{ at } (-d) + 1\}$ による。

$$\begin{aligned} V_n &= \text{¥}10,000 \times (11.3372 + 1) \\ &= \text{¥}123,373 \end{aligned}$$

$$\text{(検)} \quad \text{¥}116,171 \times (1 - 0.005)^{-12} = \text{¥}123,373$$

次に,

$$(1-d)^{-1} = \left(1 - \frac{d_{(m)}}{m}\right)^{-m}$$

を考える。

$$\text{ここで, } -\frac{m}{d_{(m)}} = x' \text{ と置くと, } -m = x' \cdot d_{(m)}$$

となり, 上式は,

$$\lim_{m \rightarrow \infty} \left\{ \left(1 + \frac{1}{x'}\right)^{x'} \right\}^{d_{(m)}} = e^{d_{\infty}} = e^{\delta'}$$

となるが,

$$\begin{aligned} 1+i &= \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^m = e^{\delta} \\ &= (1-d)^{-1} = \left(1 - \frac{d_{(m)}}{m}\right)^{-m} = e^{\delta'} \end{aligned}$$

$$\therefore \delta = \delta'$$

δ' は割引力といい, 利力に等しい。

$$f = \left(1 - \frac{d_{(m)}}{m}\right)^{-m} = e^{\delta}$$

$e^{\delta'}$ と置けば, ii) の場合と同様である。

(2) 年 p 回払年金

この場合は, その 1 支払期を単位に採る。

いま, $f = \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^{\frac{m}{p}}$ を利用する場合について論ずる。

$$\left\{ \begin{array}{ll} \text{元利率} & \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^{\frac{m}{p}} \\ \text{支払金} & \frac{R_t}{p} \\ \text{期数} & np \end{array} \right.$$

公式〔1〕 $V_0 = \sum_{t=0}^{np} \frac{R_t}{p} \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^{-\frac{m}{p} \cdot t}$

公式〔2〕 $V_n = \sum_{t=0}^{np} \frac{R_t}{p} \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^{mn - \frac{m}{p} \cdot t} = V_0 \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^{mn}$

$\frac{R_t}{p} = \frac{R}{p} (1+z)^{\frac{1}{p}(t-1)}$ n 期期末払のとき z は年単位

$$\begin{aligned} V_0 &= \sum_{t=1}^{np} \frac{R}{p} (1+z)^{\frac{1}{p}(t-1)} \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^{-\frac{m}{p} \cdot t} \\ &= \frac{R}{p(1+z)^{\frac{1}{p}}} \cdot \sum_{t=1}^{np} \left\{ \frac{\left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^m}{1+z} \right\}^{-\frac{1}{p} \cdot t} \\ &= \frac{R}{p(1+z)^{\frac{1}{p}}} \cdot \frac{1 - (1+i'')^{-n}}{(1+i'')^{\frac{1}{p}} - 1} \quad \text{ただし} \quad \frac{\left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^m}{1+z} = 1+i'' \end{aligned}$$

$z=0, m=1$ のとき

$$\begin{aligned} V_0 &= \sum_{t=1}^{np} \frac{R}{p} (1+i)^{-\frac{1}{p} \cdot t} = \frac{R}{p} \cdot \frac{1 - (1+i)^{-n}}{(1+i)^{\frac{1}{p}} - 1} \\ &= \frac{R}{p} \cdot a_{\overline{np}|i} \text{ at } \{(1+i)^{\frac{1}{p}} - 1\} \\ &= R \cdot \frac{1 - (1+i)^{-n}}{i} \cdot \frac{i}{p\{(1+i)^{\frac{1}{p}} - 1\}} = R \cdot a_{\overline{n}|i} \cdot S_{\overline{n}|i}^{(p)} \end{aligned}$$

〔例6〕 年額 ¥120,000 を年6回払2か年間支払われ期末払年金現価を求めよ。ただし、年利
率6%とする。

〔解〕 ① $V_0 = \frac{R}{p} \cdot a_{\overline{np}|i} \text{ at } \{(1+i)^{\frac{1}{p}} - 1\}$ による。

$$\begin{aligned} V_0 &= \frac{\text{¥}120,000}{6} \times a_{\overline{2 \times 6}|0.06} \text{ at } \{(1+0.06)^{\frac{1}{6}} - 1\} \\ &= \text{¥}20,000 \times 11.27224922 \\ &= \underline{\underline{\text{¥}225,445}} \end{aligned}$$

② $V_0 = R \cdot a_{\overline{n}|i} \cdot S_{\overline{n}|i}^{(p)}$ による。

$$\begin{aligned} V_0 &= \text{¥}120,000 \times 1.83339267 \times 1.0247168 \\ &= \underline{\underline{\text{¥}225,445}} \end{aligned}$$

$\frac{R_t}{p} = \frac{R + \frac{Q}{p}(t-1)}{p}, f = e^{\frac{f}{p}}$ n 期期末払のとき Q は年額

$$V_n = e^{\delta n} \cdot \sum_{t=1}^{np} \frac{R + \frac{Q}{p}(t-1)}{p} \cdot e^{-\frac{f}{p} \cdot t}$$

$$\begin{aligned}
&= e^{\delta n} \left\{ R + \frac{Q}{p} \left(\frac{1}{e^{\frac{\delta}{p}} - 1} + np \right) \right\} \frac{1 - e^{-\delta n}}{p(e^{\frac{\delta}{p}} - 1)} - \frac{Qn}{p(e^{\frac{\delta}{p}} - 1)} \\
&= \left\{ R + \frac{Q}{p(e^{\frac{\delta}{p}} - 1)} \right\} \frac{e^{\delta n} - 1}{p(e^{\frac{\delta}{p}} - 1)} - \frac{Qn}{p(e^{\frac{\delta}{p}} - 1)}
\end{aligned}$$

$Q=0$ のとき

$$V_n = R \cdot \frac{e^{\delta n} - 1}{p(e^{\frac{\delta}{p}} - 1)} = R \cdot S_{\overline{n}|}^{(p)} \text{ at } (e^{\delta} - 1) = \frac{R}{p} \cdot S_{\overline{np}|} \text{ at } (e^{\frac{\delta}{p}} - 1)$$

p 回払年金においても、評価時点移動自由の原則は成立する。

(3) 連続年金

年 p 回払において、 $p \rightarrow \infty$ と仮定したものを連続年金という。

$$\text{公式〔1〕} \quad V_0 = \lim_{p \rightarrow \infty} \sum_{t=0}^{np} \frac{R_t}{p} \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m} \right)^{-\frac{m}{p} \cdot t}$$

$$\text{公式〔2〕} \quad V_n = \lim_{p \rightarrow \infty} \sum_{t=0}^{np} \frac{R_t}{p} \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m} \right)^{mn - \frac{m}{p} \cdot t} = V_0 \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m} \right)^{mn}$$

$$\frac{R_t}{p} = \frac{R}{p} (1+z)^{\frac{1}{p}(t-1)} \quad n \text{ 期期末払のとき}$$

$$\begin{aligned}
V_0 &= \lim_{p \rightarrow \infty} \sum_{t=1}^{np} \frac{R}{p} (1+z)^{\frac{1}{p}(t-1)} \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m} \right)^{-\frac{m}{p} \cdot t} \\
&= R \lim_{p \rightarrow \infty} \frac{1 - (1+i'')^{-n}}{p(1+z)^{\frac{1}{p}} \{ (1+i'')^{\frac{1}{p}} - 1 \}} \\
&= R \lim_{p \rightarrow \infty} \frac{\frac{1}{p} \{ 1 - (1+i'')^{-n} \}}{(1+z)^{\frac{1}{p}} \{ (1+i'')^{\frac{1}{p}} - 1 \}}
\end{aligned}$$

分母子を各別に微分して極限值を採る。

$$V_0 = R \cdot \frac{1 - (1+i'')^{-n}}{Ln(1+i'')} = R \cdot \bar{a}_{\overline{n}|} \text{ at } i''$$

期首払を求めると、

$$\begin{aligned}
V_0 &= \lim_{p \rightarrow \infty} \sum_{t=0}^{np-1} \frac{R}{p} (1+z)^{\frac{1}{p}t} \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m} \right)^{-\frac{m}{p} \cdot t} \\
&= R \lim_{p \rightarrow \infty} \frac{\frac{1}{p} \{ 1 - (1+i'')^{-n} \}}{(1+z)^{\frac{1}{p}} \{ (1+i'')^{\frac{1}{p}} - 1 \}} (1+i'')^{\frac{1}{p}} \\
&= R \cdot \frac{1 - (1+i'')^{-n}}{Ln(1+i'')} = R \cdot \bar{a}_{\overline{n}|} \text{ at } i''
\end{aligned}$$

となって、期末払と一致する。すなわち連続年金においては、期首払と期末払の区別はない¹¹⁾。

$z=0, m=1$ のとき

$$V_0 = R \cdot \frac{1 - (1+i)^{-n}}{\delta} = R \cdot \bar{a}_{\overline{n}|i} \quad 1+i'' = 1+i$$

$z=0, m \rightarrow \infty$ のとき

$$V_0 = R \cdot \frac{1 - e^{-\delta n}}{\delta} = R \cdot \bar{a}_{\overline{n}|} \text{ at } (e^\delta - 1) \quad 1+i'' = e^\delta$$

$$\frac{R_t}{p} = \frac{R + \frac{Q}{p}(t-1)}{p}, \quad f = e^{\frac{\delta}{p}} \quad \text{のとき}$$

$$V_n = \lim_{p \rightarrow \infty} \sum_{t=1}^{np} \frac{R + \frac{Q}{p}(t-1)}{p} \cdot e^{\delta n - \frac{\delta}{p} \cdot t}$$

前項(2)から

$$\begin{aligned} V_n &= \lim_{p \rightarrow \infty} \left\{ \left(R + \frac{\frac{1}{p} \cdot Q}{e^{\frac{\delta}{p}} - 1} \right) \frac{\frac{1}{p} (e^{\delta n} - 1)}{e^{\frac{\delta}{p}} - 1} - \frac{\frac{1}{p} \cdot Q n}{e^{\frac{\delta}{p}} - 1} \right\} \\ &= \left(R + \frac{Q}{\delta} \right) \frac{e^{\delta n} - 1}{\delta} - \frac{Q n}{\delta} = \left(R + \frac{Q}{\delta} \right) \bar{S}_{\overline{n}|} \text{ at } (e^\delta - 1) - \frac{Q n}{\delta} \end{aligned}$$

変額連続年金においても，評価時点移動自由の原則は成立する。

最後に，連続年金を求めるのに，積分を利用できることを示しておこう。

$$\begin{aligned} V_0 &= \int_0^n R(1+z)^t f^{-t} dt \quad t-1 \rightarrow t \\ &= \int_0^n R \left(\frac{f}{1+z} \right)^{-t} dt = R \left[- \frac{\left(\frac{f}{1+z} \right)^{-t}}{\text{Ln} \left(\frac{f}{1+z} \right)} \right]_0^n \\ &= R \cdot \frac{1 - \left(\frac{f}{1+z} \right)^{-n}}{\text{Ln} \left(\frac{f}{1+z} \right)} \quad 12) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} V_0 &= \int_0^n (R+Qt) f^{-t} dt = R \int_0^n f^{-t} dt + Q \int_0^n t f^{-t} dt \\ &= R \left[- \frac{f^{-t}}{\text{Ln} f} \right]_0^n + Q \left[\frac{-f^{-t}(t \cdot \text{Ln} f + 1)}{(\text{Ln} f)^2} \right]_0^n \\ &= R \cdot \frac{1 - f^{-n}}{\text{Ln} f} + Q \cdot \frac{1 - f^{-n} - n f^{-n} \text{Ln} f}{(\text{Ln} f)^2} \\ &= R \cdot \frac{1 - f^{-n}}{\text{Ln} f} + Q \cdot \frac{\frac{1 - f^{-n}}{\text{Ln} f} - n f^{-n}}{\text{Ln} f} \quad 12) \end{aligned}$$

- 1) 評価時点移動自由の原則を一応明言された最初の文献は、次の2書であろう。
 久武雅夫：商業計算提要 1951年 p. 41
 C. H. Franklin : The Mathematics of Finance 1951 p. 63
- 2) $j_{(m)}$ を用いることもある。
- 3) $1+i = \left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)^m = e^\delta$ $e \dots$ 自然対数の底数
 $\delta = Ln(1+i) = m \cdot Ln\left(1 + \frac{i_{(m)}}{m}\right)$ $Ln \dots$ 自然対数
- 4) $\sum_{t=1}^n (1+i)^{-t} = (1+i)^{-1} + (1+i)^{-2} + \dots + (1+i)^{-n}$
 $\{1 - (1+i)^{-1}\} \sum_{t=1}^n (1+i)^{-t} = (1+i)^{-1} - (1+i)^{-(n+1)}$
 $\therefore \sum_{t=1}^n (1+i)^{-t} = \frac{(1+i)^{-1} - (1+i)^{-(n+1)}}{1 - (1+i)^{-1}} = \frac{1 - (1+i)^{-n}}{(1+i) - 1}$
- 5) アドオン方式の詳細については、次稿参照。
 拙稿：消費者金融におけるアドオン方式 商業数学会誌 第21号 (1968.12)
- 6) 簡単であるから、証明は省略する。
- 7) $i' = -d$ と置くと $a_{\overline{n}|i'} = \frac{1 - (1-d)^{-n}}{-d} = \frac{(1-d)^{-n} - 1}{d}$
 本稿第7節(1) iii) 割引率による年金現価 参照。
- 8) 拙稿：“3” 参照。
- 9) 拙稿：会計数理の基本公式——Hoskold 公式の拡張——本学会誌第6巻第1号 (1970.4) 参照。
- 10) 前注 公式[606]に当たる。
 旧 MAPI 方式についての詳細は、次書参照。
 拙著：新会計数理 1977年 p. 121~p. 124
- 11) 注10 拙著 p. 141 参照。
- 12) 拙稿“1” p. 78—p. 79 参照。(ただし、引用稿は終価であることに注意)
 拙稿“2” p. 32 を拡張。
 M. Saada : Pour s'initier aux Mathématiques financières fascicule 1 1979 p. 217, p. 219 は
 $f = e^\delta$ の場合を部分積分法で解いている。

(1984.9.8.稿)